

黄瀬涼太に転生した男がハイキュー!!世界で楽しむお話

t—chi

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

平凡なスポーツ好きの男が黄瀬涼太になってハイキュー!!世界で暴れるお話です。原作改変、(主に)日向翔陽、影山飛雄のキャラ改変が含まれます。

目次

| | |
|---------------|----|
| プロローグ | 1 |
| 幼少期編 | 3 |
| vs 北川第一 1 | 5 |
| vs 北川第一 2 | 9 |
| vs 北川第一 3 | 14 |
| 激闘、その後 | 19 |
| ファーストコンタクト | 24 |
| スーパールーキー、お披露目 | 28 |
| スーパールーキー、激突 | 34 |
| 激闘、また激闘 | 41 |

プロローグ

強烈に憧れた。

高く跳び、速く走り、強く打つ、そんなプロのスポーツの世界に男は憧れていた。

男が憧れたのは現実だけではない、スポーツ漫画が好きだった男は、自分もこうであったかっただと思う。

しかし男は平凡だった。身長も、身体能力も、当然才能も、叶わぬ願いと知りながら、しかし常に夢を見ていた。

——ならば、その願い叶えてやろう

そして、男は生まれ変わる。強烈な才能を持つ身体へ、男が憧れた世界へと。



「何か聞こえた様な…いや、気の所為か？」

男は今日も学校へ行くために起き上がろうとし、強烈な違和感に気付く。

「あれ…？身体が小さい…？」

「涼太…！早く起きなさい！」

階下から届く聞き馴染みのない声、涼太？と疑問符を浮かべながら、男は下に降りた。ドアを開けると金髪の綺麗な人が朝食を運んでいた。状況を見てかなり若いが母親だろうと当たりを付けた男は、

「おはようお母さん」

と、挨拶、しかし母親だろうと思われた美人は肩を震わせる。しまった…姉だったかと後悔したのも束の間。

「お、お母さん…！？いつもママって呼んでくれるのに！一体どうしたの!?まさか反抗期!?!」

思わずズツコケそうになったのを堪え、

「お、おはようママ、さっきのは冗談だよ」

「何よく！ビックリしたわ、もう！早く顔洗って、朝ごはん食べなさい！遅刻するわよ！」

「分かったよ」

しかしいい歳してママって…と少し項垂れながら洗面所に向かう。男は金髪の母と、涼太という名前から自分が誰になったか少しアタリをつけていた。そして鏡を見て確信する。

「やっぱり…この顔立ち、金髪に金色の瞳…涼太という名前、間違いない、俺は黄瀬涼太になったんだな！」

——黄瀬涼太

大人気バスケット漫画、『黒子のバスケ』に登場する「キセキの世代」と呼ばれるメインキャラの1人、持ち前の運動神経と身体能力を駆使し、見ただけで他人のプレーをコピーするという能力を持つ。またかなりのイケメンでモデルもこなす為、女性人気も高い。

——この歳からバスケットに取り組めば、最強になれるのでは？

黄瀬は作中、何でも出来た為スポーツに真剣に取り組んでいなかったのだが、中学2年生の時、たまたま見たバスケット部の練習に真似出来ないプレーヤーがいた事からバスケットを始めたという設定がある。しかし現在、恐らく小学校低学年、この時期から真剣にトレーニングや練習に励めば作中の黄瀬を越えられると男は思ったのだが…

「涼太ー！何時まで顔洗ってるの！早くしないと翔陽くんが来るわよ！？」

翔陽：？そんなキャラ黒バスに居たか？と思いつながら、

「今戻るー！」

——ピンポーン

「もう翔陽くん来ちゃった！はーい！今開けるわね！」

「おはよう涼太！今日も公園で遊ぼうぜ！」

男は驚愕した、それもそのはず、黒子のバスケット世界に居ないはずの日向翔陽がその場に居ただけだから。

幼少期編

——ふむ、これは都合が良いかも

男は冷静だった。目にした瞬間は驚いたものの、それを表情に出すことなく思考を進める。

——まずはどちらの世界かの確認と、年齢からだ

あまり言いたくはないが、日向翔陽は頭が良くない、現在地や年齢を聞いても疑うことなく教えてくれるだろう。後で聞くことを決め、男は靴を履いた。

「行ってくるよママ！16時には帰るから！」

「はい、行ってらっしゃい！」



「なあなあ、ここって宮城県だっけ？」

男はまず現在地の確認を行った、宮城県ならハイキュー!!、関東なら黒子のバスケと判断する事に。自然の多さと、自身が黄瀬涼太になり日向翔陽が存在するといった状況から、恐らくハイキュー!!の世界であろうと思つての質問である。

「そうだよ！」

「ありがとう、なら僕らは1年生だったよね？」

疑うことなく答えた日向に対し、立て続けに質問をぶつける。

「おう……しかし今日のりよーたはどうしたんだ？言葉も変だし当たり前前の事聞いてくるのな！」

しまった、急ぎすぎたか……？男は少し焦ったが、

「まあいいや！遊ぼうぜ！」

アホでよかったと失礼な事を思いつつ、男はほっとする。兎に角これでハイキュー!!の世界であること、自分達がまだ1年生である事を確認し、男は考える。

——ならば、早いうちから日向を鍛えてしまおう

男は原作改変に抵抗は無かった、原作で破れたインターハイ予選、そして春高バレー準々決勝を超え、大好きな烏野の選手達のプレーをもっと見たいと考えたのである。

「そう？変だったかな…？まあ良し！じゃあ何して遊ぶ？」

帰ってからバレーボールを強請る事を決めつつ、取り敢えず今は遊ぼう、そう決めて日向と追いかけてここを始めた。



「しっかしほんとに小学1年生の身体なのか？めっちゃ動きやすいんだが…やっぱリキセキの世代ハンパねえ」

散々公園で遊んだ後、日向と別れて帰路につく。平凡だった前世と比べて、格段に動きやすい身体に驚きつつ

「でもこれで烏野をもっと勝たせられる、日向と影山と全タイトル取るくらいの気持ちで行こう、自重なんてしてたまるものか」

そう決意し…

「ただいま！ママ！」

「おかえりなさい！手を洗って、着替えてきなさい！」

「はい！…所でママ、僕バレーボールがしたいんだ！日向と遊ぶから、ボール買って！」

——日向に怪しまれたしな、恥ずかしいのは我慢だ

早速強請る男、元が18歳である事を考えずに小学生らしく振る舞う決意を固めた。

「バレーがしたいの？…まかせなさい！こう見えてママは大学までバレーボールをやっていたの！今も軽くやってるから、今度連れて行ってあげるわ！ボールも幾つか持っているから、それをあげるわね！」

——なんて都合が良い…しかしこれはラッキーだ、レベルは兎も角実際にプレー出来るのは日向のレベルアップに繋がるぞ

「ありがとう！ママ！ママのバレーボールを見るの楽しみ！」

「涼太が来るなら良いところ見せないかね！」

張り切る母を後目に、男は日向をどうやって鍛えていくのかで頭がいっぱいとなっていた。そしてここから原作から大きく乖離した物語が始まるのである。

V S 北川第一 1

——そうして、8年の月日が経った

7歳時から始まった2人のバレーボール生活は、2人の才能と経験者である母親が居るといふ環境によつて、かなり充実したものであった。

原作と違いゴールデンエイジにボールを使った練習を繰り返した日向は、基礎を徹底したことにより、既に原作開始時より大きく成長した状態で中学生となっていた。

※ゴールデンエイジ：子供の運動神経が格段に成長する、5〜12歳の時期の事

「しかし身長はそんなに変わらなかったな…原作の強制力つてやつか」

スポーツ好きであった男には知識があつたため、ゴールデンエイジ間での基礎の徹底や、成長ホルモンが多く分泌される様、21時には睡眠を取るように日向共々徹底していたのであるのだが…

「日向は15歳の4月で158cm、俺は183cm…恐らく高校入学時には原作通りの身長になりそうだ」

男としては日向の身長が大きく変わる事を期待していたのだが、冷静に考えれば原作でも日向が夜更かしするような生活をしていないとは思えない為、さほど変わらないのは当然と言えた。

「俺たちも中学3年、これまでは公式戦に出られなかったけど、いよいよ北川第一と試合が出来るんだな！」

——俺と日向で、会場全て度肝を抜いてやる、後影山も救えたら良いなあ

◆ この男、何もかも原作改変する気満々である。

「体育館…でけえ…！それにエアースロンパスのにおい…！」

「おおっ…！じゃない、そうだな、俺らが今まで使ってきた体育館とは違うな」

分かっていたとはいえ、実際にエアースロンパス発言を聞くのは感

慨深いなあ…といった想いが思わず漏れてしまったが、気を取り直して同調する。

「ちよつと2人ともなに感慨にふけってるのさ」

「それになんだよエアーサロンパスのにおいってー!」

泉行高と関向幸治、本来バスケット部とサッカー部の2人は、自身の部活動が先に終わった為、助っ人として日向に引っ張られていた。

「だ、だってよー!3年目にして初出場だぞー!」

「そうなんだよなあ…やつぱり初めてだからさ、こうもなるよ、兎に角出られるのは2人のお陰だ、ありがとう」

思わず感情的になり、涙目になる日向とは対象的に、黄瀬はあくまで落ち着いた対応、助っ人の2人にニコリと笑いかけながらお礼をいう余裕まである。

その2人を見比べた泉と関向は、

「いや泣くなよ…それになんか小っ恥ずかしいな」

「泣いてない!」

「ま、まあ先に大会終わったし…しかし2人を見てると保護者と子供みたいだな」

「なんだとー!」

「ほらほらキャプテン、しっかりしな」

まるでコントの様なやりとりであったが、黄瀬は実際に原作が始まるのだと思うと不思議な感動を覚えていた。

——日向の弄られ具合、烏野でもそうなんだろうなあ

と、これから来る未来に思いを馳せる。

「これからキャプテンらしくするから!…:1年生もほんとにありがとう!3人も入ってくれてるなんて思ってた!」

「い、いえ…まだ素人同然ですし…」

「関係ないよ、俺たちが試合出来るのも1年生達のお陰だから…翔陽、そろそろアップ始めようか」

「おう!やつと出られた試合、絶対勝つぞー!」

その言葉に、泉と関向はえ?!と一瞬身体を止め、

「ええー…この即席チームで勝つつもり？」

「お相手さんの北川第一…って強いのか？」

「強いよ、それもとびつきり、優勝候補」

「えええ!？」

日向には北川第一が強い事は伝えてある。それでも勝とうと言った事に対して内心笑みを浮かべていた。

「ん？噂をすれば何とやら…あれが北川第一だよ」

そう言うと同時に、観客席が沸いた。

日向達が見上げると、そこには北川第一の垂れ幕と、沢山の部員達が声を張り上げている光景。

「あれが北川第一だ」「すっげー!」

「威圧感ハンパねえ」「流石優勝候補」

と、北川第一を賞賛する声と、

「相手は…どこ?」「雪ヶ丘中学だって」

「聞いたことないな」「今年創部1年目だって」

「まじ?いきなり北川第一かよ、可哀想」

「でも1人めっちゃでかい子いるよ…ええ!?!あの子超イケメンじゃない!?!」

「ほんとだ!頑張ってる!イケメンくーん!」

と、日向達を憐れむ声と、黄瀬を応援する黄色い歓声が耳に届く。

「はあくなるほど、そんなに強いのか」

「ここまで来るといつそ緊張通り越しちゃうね」

「大丈夫だって!涼太と俺があいつらを撃ち抜いてみせる!」

「まあ、会場中の誰もが俺達が勝つとは思ってないだろうし…気楽に行こう、それで度肝を抜いてやる、相手が誰だって関係ないよ…そう、王様でもね」

そこで周りの声が一際大きくなる。影山飛雄が少し遅れて入ってきたのだ。

「あれが【コート上の王様】の影山飛雄だ」

「何そのコート上の王様って」

「それだけ凄いセッターってことらしい」

「うえっ!? 周りも強そうだけど、あいつだけ威圧感が違うな…」

「やっぱり緊張してきた…」

「ま、なるようになるさ」

「コート上の王様…絶対勝つ!」

他の5人が緊張を強める中、日向は寧ろ燃えていた。

そして、黄瀬は湧き上がってくる歓喜の想いに打ち震えていた。

まもなく、日向と影山、黄瀬の…沢山の人達の運命を変える試合が始まる。

V S 北川第一 2

アツプを終えコートサイドに集まる7人、彼らは作戦とは言えない作戦を話し合っていた。

「やる事は覚えてるな、兎に角上げる、それで俺と翔陽がどうにかする
…な、翔陽」

「おう！任せとけ！俺と涼太が何とかする、してみせる！それで王様に勝つ！」

「ひゅー、かっけえなあ！俺も言ってみたいぜそんな事」

「でもきつと何とかしてくれる、そんな気がするよ…やっぱりうちの部活に欲しかったね」

「違いねえ」

軽口を叩き合いながら、7人はエンドラインに整列する。そしてホイッスルが鳴った。

「!!!!!!お願いします!!!!!!」

コートに散らばる6人、その時黄瀬は考え事をしていた。

——影山はこの大会の決勝でトラウマが出来るんだよな

鳥野でチームメイトになるであろう影山に対し、出来ればトラウマを植え付けたくないと考える黄瀬であったが、

——しかしそんなことを考えている余裕はない

相手は紛れもなく優勝候補、一方こちらは2人以外素人同然の寄せ集めチーム、それでも黄瀬は勝つ気でいた。

——影山と会話するのは、いずれにせよ試合の後だ、まずは本気で勝ちに行く

そう考え、笑みを零しながら構えに入った黄瀬からは、強者特有の雰囲気が発せられていた。

「…っ、おい、サブ1番と2番以外狙え」

影山は黄瀬だけでなく、日向からも同様の雰囲気を感じ、思わず警戒を伝える。

「お、おう」

試合開始時から指示が飛ぶのは珍しいと思いながらも、しかし金田

一も強烈なプレッシャーを感じていた。

(あいつはやべえ、もしかしたら俺達の中の誰よりも…つてやべー!)
プレッシャーを感じていた金田一は、黄瀬を避けることで頭がいっぱいになっていた。その結果、サーブが向かった先は――

「翔ちゃん!」 「おう!」

サーブを拾ったのは日向、綺麗なAパスは黄瀬の元へ向かう。

「行け!翔陽!度肝を抜いてやれ!」

しかしこの時、まだ影山以外の北川第一メンバーは油断があった。雰囲気を感じながらも、160cm弱の身長を見てしまつては仕方がない事であろう。

――そりやそうだな

依然気持ちの乗り切っていない北川第一の選手達を見て、黄瀬は笑う、この後の彼らの驚きようが目には浮かぶからだ。

ドントツ!!

その跳躍に、会場中が動きを止めたかの様な錯覚を覚える。綺麗な放物線を描いたトスに対し、最高のジャンプで応えた日向、そして、

ズドントツ!!

北川第一のブロックは届かず、ボールはコートに叩きつけられる。少しの静寂が会場を包み、数秒後――

「すげー!何だ今のジャンプ!」

「あの1番小さいのにブロックの上いったぞ!」

「スパイクも凄い威力だった!」

「翔ちゃんすげー!」 「ナイスです!日向先輩!」

「良くやった翔陽!」 「おう!」

「なんだ今の…」 「すげえ跳んでたぞ…」

「今のはやべえな…」 「ああ…」

湧き上がる会場、そして驚いた北川第一、しかしその歓声をかき消す音量で、

「おい!!1番と2番以外狙えつて言つたらろ!何してんだ!!」

影山の怒声が響く。

「あ、ああ、スマン…」

「ちっ、ちゃんとしろ！見て分かっただろ、あいつらは強いんだ！油断してつと足元掬われんぞ！」

雪ヶ丘サイドは、影山の怒声に完全にビビっていた。

「ひえっ……っわ」

「あれが王様と呼ばれる所以なのかもね」

——原作通り、だな、まあそりやそうだな

影山の怒声を聞いた黄瀬は、やはりこのままだと孤立するだろうと確信し、

——どうにかしねえとな、烏野が全部勝つ為には、高校に来る前に変えとく方が良い

試合前に余裕はないと思っておきながら、しかし実際に目の当たりにするとやはり考えてしまう。

身勝手な理由ではあるが、影山を救う事を改めて決意した。



スコアは1-0、予想外の雪ヶ丘先制で迎えるサーブは黄瀬。

「いけー！涼太！」

「すげーの頼むぞ！」

「任せとけて！」

「サーブ警戒！」

「！！！！おう！！！！」

——エンドラインから6歩、2回突いてボールを回す

黄瀬のルーティン、エンドラインから歩いて6歩は、言わずもがな、いずれ戦うことになるだろう選手を真似したものだ。

「さて、ここで何点が取らないとね」

——ヒュッ

高々と上がったトス、コピーが得意な黄瀬にとって、サーブトスのミスは無縁なものである。

(マジかよ……!?)

北川第一側が目を見開いた次の瞬間、

——ダァン！

コートに突き刺さるノータッチエース、線審も、観客席も、北川第

一の選手も、誰も反応出来なかった。

「よっしゃー！ナイスサーブ涼太！」

「いやー、練習でも見たけど、やっぱりやべえわ」
「だなー！」

素直に喜ぶ雪ヶ丘の面々、その声で我に返り、

「うおおおお！」「なんだ今の！無名校の選手がやるサーブじゃねえぞ！」「すげええええ！」

響き渡る大歓声、そして、

「いやいやいや…」「あんな無理でしょ…」

「くそっ…（今のサーブ、俺より、いやもしかしたら及川さんよりも…）」

「しっかり気持ちを切り替えろ！あんなサーブ、そうそう入るものではない！（一番もそうだが、何であんな選手が無名校に…？これまで何処でやっていた）」

見送ることしか出来なかった北川第一の面々は絶句、監督はこんな逸材何処に居たのかと考えながらもしっかりと檄を飛ばす。

「無理やりでもなんでも拾うしかねえんだ！気合い入れろ！」

「あ、ああ…」

日向のスパイクと黄瀬のサーブ、強烈な2本の衝撃に目を覚ました北川第一、彼らはみな揃って強者揃い、黙ってやられているような柔らかな実力をしていなかった。

興奮冷めやらぬ中、

「もう一本！涼太！」

「頼むぜ！」

——目付きが変わった、やはり一筋縄ではいかないか
続けて黄瀬のサーブ、再び強烈なサーブがいったが、

「オーライ！ぐっ…！」

流星は北川第一のレギュラー、Aパスとはならずともしっかりと上げてみせた。

「国見！」

影山の綺麗なトス、やはりセッターとしては超一流なそのトスを、

「しっ！」

国見はしっかりと叩きつける。日向と黄瀬以外は素人同然の雪ヶ丘に、それを止める術はなく、コートに突き刺さる。

「よしっ！」

黄瀬のサーブを切れた事に珍しくガッツポーズをする影山、それを見たチームメイトは、

(あの影山がガッツポーズとは…)

(あいつはそれだけ勝ちたいんだな)

少しずつ見る目が変わっていく、彼の飽くなき勝利の渴望が、北川第一を良い方向に変えていく。

V S 北川第一 3

「いやーしかし、凄い中学生も居たもんだなあ」

「マジ半端ないっスね！」

「王様は兎も角、あの1番2番うちに来てくれたりしないかなあ…」

「あの2人、ほんとに無名だったの？」

「ん、パンフには3年生って書いてある、1年生が3人居るから、やつと人数集まったんだと思う」

「なるほどなあ…」

観客席では、黒いジャージを纏った4人が試合を見ていた。

その背中には「烏野高校排球部」の文字、彼らが来ていることを原作を知っている黄瀬は分かっているが、日向には伝えていない。(舞い上がられても困る為)

「どちらにせよ、あの2人が宮城のバレーを盛り上げてくれる事は間違いないな」

「それが俺達と一緒に嬉しかったら嬉しいっスね！」

「ははっ、そうなるといいな、期待せずに待つてようか」

澤村の発言には1つ誤りがあった。日向と黄瀬が宮城のバレーを盛り上げる事は間違いないが、それは2人では無く――

ネットを挟んで対峙する、王様を含めた3人なのだから。



試合は日向と黄瀬がスーパーなプレーを繰り返す雪ヶ丘のリードで進行していた。

しかし2人以外は素人、徐々に2人のプレーにも慣れてきた北川第一が追い上げてきている。

――スコアは22―21、自力を考えればよくここまでリードしてきたが

黄瀬の1度目のローテは上手く切られたものの、日向もスパイクサーブを繰り返したことで、2度目、3度目の黄瀬のサーブのローテで複数点を取った事で雪ヶ丘に貯金があった。

――日向のサーブでこのセットを取りたいが…

そこは天下の北川第一、黄瀬のサーブを何度か受けてきた事もあり、日向のサーブをすっかり上げてきた。

そして繋いだトスを金田一がしっかりと打ち込む。

「じゃあー!」いいぞ金田一!

北川第一はあの後、影山をベンチに下げていた。何故そうなったか、それは黄瀬のサーブを切った後に繋がる。

「よしっ!」

影山のガッツポーズの後、影山もガッツポーズをするのか、勝ちたい思いが強いだけなのかと少し影山を認め、同時に強力なサーブを切ったことにより少し弛緩した空気が流れた。

それを察知した影山は、

「おい! 氣い抜いてんじゃねえ! 次取るぞ!」

この叱責が、1度許しかけた雰囲気を見失わせた。しかし監督はここがチャンスと見抜き、即座に動いた、影山をベンチに下げたのである。

「え? 王様交代?」 「まだ2―1なのにな?」

「温存には早いよなあ」

「監督! 何故俺が替えられるんですか!」

納得出来ずに監督に詰め寄る影山、そしてそれを冷たい目で見るとチームメイト、それを見た監督は、

「あの2人を見てろ、お前が抜けたあとのチームも、このセットの間に答えが分からなければ、俺はもうお前を使わない」

影山は理解が出来なかった。しかし試合に出られないのは嫌だった為、試合をベンチから見守る事にする。

(何で俺が…あいつらよりも俺の方が上手いのに、何で…)

◆ 「すまなかった」

試合はその後、日向のサーブを一本で切った北川第一が、25―22で第1セットを獲得していた。

コートに戻ってきたチームメイトに、開口一番、影山は謝罪する。

目を丸くするチームメイト、それでも国見だけは冷ややかな視線を送っていた。

「何に対して謝ってんの」

「全てだ」

今度は国見も目を丸くする、驚いて声が出ないチームメイトに対して、

「これまで俺は、俺が1番上手い、俺が1人で全部出来ればと思っていた。しかしそれは間違っていた、雪ヶ丘は2人が突出しているが、それでもチーム全員に声をかけ、鼓舞し、全員の力でぶつかってきた」
「…それで？」

「お前らも、俺が居なかったら何も出来ないと思っていた、俺が1番上手いから、俺についてくるのが当たり前だろうと…でもそれは違った、俺が居なくても、相手に凄い才能があっても、お前らは声をかけ、協力し、そして逆転でセットをとって見せた」

北川第一の静けさに、雪ヶ丘ベンチも何事かと注目して見る。

——これは、俺が何をしなくても大丈夫そうだな

と安堵すると同時に、この試合はもう勝てないかと確信する黄瀬。

——それでも諦める理由にはならない、このメンバーでやれる試合は負ければもう無いんだ、悔いは残さない

と、決意を固める黄瀬。

向こうのベンチでは、

「俺も、バレーがしたい、1人で何でも出来るバレーじゃなくて、お前達と、仲間と、バレーがしたい、そして凄いあいつらを倒したい…だから、すまなかった、俺と一緒に、バレーをしてくれないか」

黙り込むチームメイト、誰も何も言えない。

(そりやそうか…俺はこれまで酷い態度を取ってきた、そんな奴にいきなり謝られても…)

——やれやれ、まあここは人肌脱いでやりますか

「影山！俺はお前と一緒にバレーがしたいよ！」

「俺も！お前のトス、もっとみたい！」

(なっ——！)

沈黙を破ったのは、敵であるはずの黄瀬と日向だった。そして、
「もう1回あんな態度をとったら承知しないからな」

1番嫌っていたはずの、国見。

「ああ！俺はもう間違えない、お前らと一緒に上に行く！」

そして、1つになった北川第一が雪ヶ丘に牙を剥く。



第2セットは、1つになった北川第一が常にリードする展開、雪ヶ丘は2人の活躍で追いつがるが、それも単発に終わり、徐々に差が広がっている。

「1番と2番…あの2人が影山の意識を変えた、あいつが機能すれば、うちはそうそう負ける事はない、あの2人には感謝だな」

長年悩みであった影山の孤立、それを解決したのが自身でなく無名校の選手であったことに力不足を感じていた。

「が、それはそれ、これはこれだ、これを糧にして、まだまだ成長出来るという事…あの2人は全くとんでもないな」

それと同時に、あの2人の凄さを感じていた。

「あの2人は、高校で一体何を成し遂げるのか、楽しみが1つ増えたわ」

「くそー！差が縮まらない！」

「いやいや、よくやったって、相手優勝候補でしょ？」

「王様が戻ってきてから、強さが全然違うもんな」

「うがー！俺はまだ諦めねえぞ！ボールが落ちなきや、点は取られないんだ！」

「翔陽の言う通り、ここまで頑張ってきたんだ、最後まで食らいつこうぜ！」

「まあ涼太が言うなら…」

「何でだ！」

スコアは16―24、北川第一のマツチポイント、それでも彼らは諦めず、そして同時に試合を楽しんでいた。

サーブは影山、

「ありがとう、お前らと試合をしてなきや、俺は大きな間違いを犯すところだった…願わくば、いずれあいつらと一緒にバレーがしたい」

そして放たれた影山のサーブは

黄瀬の腕を弾き飛ばして――

この試合、影山の最初で最後のサービスエースとなった

試合終了

雪ヶ丘 0 (22―25 16―25) 2 北川第一

北川第一中学校 2 回戦進出

激闘、その後

ホイッスルが鳴り響く。

この瞬間、雪ヶ丘中学校男子バレーボール部の最初の挑戦が終わった。

両チームはエンドラインに整列、礼をする。

「わりー最後取れなかった…」

笑みを浮かべながらも悔しそうに、黄瀬はみんなに謝った。

実はこの試合中、影山は常に黄瀬を狙ってサーブを放っていた。

——全部綺麗に上げてたんだけどな

最後のサーブだけ取り切れなかった事に悔しさを滲ませていたのだ。

——最後のサーブは、完全に力が抜けていた、何かまた吹っ切れる要因があったかな

「しゃーねえよ！涼太で取れなきやしょーがない！」

「そうだね、あんなサーブ俺らじゃ絶対取れないよ」

「それでも悔しいもんは悔しいさ…それに、俺達にとっては最後の大会だったしな」

「ぐぬぬぬ…俺も悔しい！もつと長くコートに居たかった！俺がもつと強ければ…！みんなとバレー出来たのに…」

「翔ちゃん…」

悔しさの余り、肩を震わせる日向、しかしそこに、

「おいー！」

「何?!」ビクッ

悔しがる2人に声をかけた影山、しかし相変わらず声色が不機嫌そうなる為、日向は悔しさを一瞬忘れ、何かしたかとビビっていた。

「ありがとう、お前らのお陰で大切な事に気づけた」

「どう…いたしまして?」

追い打ちをかけるように突然の謝罪、日向は訳もわからず疑問形で答えるしかなかったのだが、

「ああ、色々吹っ切れたようで何より、俺たちに勝ったんだ、県大会く

「らいで負けないでくれよ?」

「勿論だ、もうあんな無様な姿は見せない、コートに最後まで立つのは
”俺達”だ」

「頑張れよ、応援してる」

「ああ」

——”俺達”ね

「ちよっ! ええ? 何だこの分かりあってる空気! 俺も混ぜろー!」

「所で!」

「ガン無視!」

「お前ら2人、高校はどこへ行くんだ? どうせ同じ所に行くんだらう
?」

「烏野!!」

影山の質問に対し、食い気味で答える2人、理由は違えど、2人は
烏野高校に強い思い入れがある。

「烏野…? お前らなら白鳥沢でも青葉城西でも行けるだろう?」

「んー…まあそうかもしれないね」

「でも俺達は烏野に行きたいんだ!」

「そうか、なら俺も烏野に行く、お前らと一緒に、バレーがしたい」

「本当か!? 俺もお前のトス、打ちたい! 一緒にやろう!」

「俺も同じ気持ちだよ、じゃあまた烏野で」

「ああ、楽しみにしている」

そうして、3人は高校での再会を誓った。

◆ 一方その頃、未来の先輩たちは…

「いやー、凄い試合を見た」

「俺らよりレベル高いんじゃないの?」

「んな事ないっすよ! スガさん! ね? 潔子さん!」

「…そうね」

帰路に着く烏野の4人、試合の余韻に浸る澤村、少し自信を失った
様に笑う菅原とそれを励ます田中、そして考え事をしている清水、し
かし4人の想いは共通だった。

(今の鳥野で、彼らが進むであろう強豪に勝てるだろうか…)

近年、県内で結果が出なくなつて来ている彼ら、新入部員も少しづつ減つており、苦しい戦いが続いていた。

「ま、俺達ももつと頑張らないとな、あいつらに負けない様に!」

「そうつすね!負けてられないっス!潔子さんの為にも!次こそは、絶対に勝ち上がります!」

「……」

「くうう!無視されても潔子さんは美しいっス!」

「あはは……」

気持ちを切り替え、今後の部活に励む面々、彼らにはこの後、大いなる壁が立ち塞がり…

そしてその壁をぶち壊す新生がやってくるのだが、勿論彼らに知る由はない。



影山が去つた後、雪ヶ丘中の面々は荷物を片してアリーナから出ていた。

「イズミンも、コージも出てくれてありがとう!お陰で楽しかった!」

「…ごめん」

「翔ちゃんを勝たしてあげられなかった…」

肩を落とす2人、そんな2人に日向は、”努めて”明るく振る舞う。

「いいんだって!出ただけでも俺達は嬉しいんだ!だからありがとう!う!勿論1年生も!また部員集めて、俺達の間も勝つてくれ!」

「…はい!必ず、日向先輩や黄瀬先輩の分まで!」

「頼むぞ!」「頼んだ!」

そして、皆が帰る中、2人が残った。

「負けたら、もうコートには立てない」

「そうだな」

「分かっていたつもりだった」

「…ああ」

「相手が強いのか、弱いのか、それは関係ないんだな」

「…そうだな!だから、強い方が勝つんじゃない、勝つた方が強いん

だ」

「だったら、俺は、誰よりも強くなる！それを、勝って証明してみせる！誰よりも長くコートに立ってやる！」

これまで堪えていた涙を流し、日向は決意する。そして、黄瀬も、
——誰よりも強くなるう、そして、烏野をどこよりも強くする。1番長くコートに立って、1番バレーを楽しめる様に
強い決意を胸に、2人は帰路についた。

◆

「翔陽、新聞見たか？すげえな、北川第一、全中準決勝で惜敗だったよ」「見た見た…ふふー！あいつあんな偉そうな事言って、最後までコートに立ってないでやんのー！」

「ええ…？笑う所じゃなくない？」

あの試合の後、影山はトラウマを作ること無く、無事に北川第一が決勝戦を勝利、全中に駒を進めていた。

その後3人で何度か練習したこともあり、3人の仲は深まっていた。影山と日向は相性が良いのか悪いのか、2人とも原作開始時よりも大人なはずだが、良く煽りあっている。

——ま、原作最終盤のプロ編でもそんな感じだったし、きつと一生そうなんだろう

その過程で2人を宥める事が多かった黄瀬、烏野でも同じ立ち回りをするのだろうと思うと今から少し憂鬱になるが…

——ま、元一般人の俺にはそれくらいが丁度良いか、烏野バレー部はキャラが濃すぎる

「所で翔陽、受験勉強はちゃんとやってんのか？」

「うっ！？また勉強教えてください黄瀬様ー！」

「はっはっは、苦しゅうない！…お前が落ちて影山と2人で入部とか…ん？翔陽と戦えるのか、それはそれで…」

——あれ？影山って確か白鳥沢落ちたんだっけ？

影山も勉強が得意では無かった事を思い出し、急に不安になる黄瀬。

「ぎゃー！王様と涼太が敵とか、想像しただけでヤバイ！そうはなり

たくないから、一生懸命勉強します！」

「よろしい！」

——あいつが全中から戻ったら、2人まとめて勉強特訓だな

「!?」ビクッ

「どうした影山？」

「いや：何でもない：（なんだ今の悪寒は：：？）」

——数日後

「おかえり！飛雄くん！全中お疲れ様！」

「あ、ああ：（どうしたんだ日向、まるで人が変わったように：：）」

「さあ涼太が待ってるよ！一緒に逝こう！」

「ん？黄瀬が？というか今のちよつとイントネーションが：：」

「さあさあ！」

その後、2人のうめき声が一晩中続いたとか続かなかったとか：

ファーストコンタクト

時は流れ、4月

「ちゃんと準備出来たか？」

「当たり前だ！」

「よし、じゃあ行くか！」

黄瀬涼太、日向翔陽、影山飛雄の3人は、黄瀬監視の元、地獄の勉強合宿のお陰か、無事烏野高校に合格。

「もうあんなに勉強したくねえ…」

「定期テストの点数悪かったらまたやるからな、しつかり授業聞いとけよ〜？」

「はいっ！ちゃんと聞きます！」

「後で影山にも言つとかないとな！」

こつてり絞られた日向と影山の2人、完全に主導権を黄瀬に握られた状態である。1年生間の力関係はこの時点ではつきりしていた。

「と、とにかく！今日から烏野でバレー、出来るんだよな！」

「ん？今日は入学式だから、部活ないんじゃない？…少なくとも、見学出来るのは明日からだな」

「ええー!?今日はバレー、できないのか!？」

「明日から嫌というほど出来るんだ、今日くらいいいんじゃないか？」

「バレーが嫌になる事はないよ?。」

「そ、そうだな…言つといてなんだが俺もねえわ」



数日後、男子バレー部の部室

男子バレー部に所属する2・3年生は、新入部員を今か今かと待ちわびていたのだが…

「澤村、これ今日きた入部届」

「ああ…ありがとう、まだ初日とはいえ、少ないなあ…昔はもつと多かったのにな…」

入部届を受け取ったのは、主将である澤村大地。

そして、その澤村に入部届を渡したのはマネージャーである清水潔

子だ。

近年結果の出ていない烏野高校男子バレー部、新入部員も年々減っており、主将の背中には哀愁が漂っていた。

「まーまー！まだ初日だし、ここから増えるって、大地！」

「潔子さん目当ての新入生が居たら、シメて叩き出してやりますよ！潔子さんは俺が守るっス！」

落ち込む主将を励ますのは、副主将である菅原孝支、そして部員が少ないと嘆く先輩たちの意図を汲まず、清水ばかりを見ているのは2年生の田中龍之介だ。

「おいおい、ただでさえ少ない新入生、大事にしてくれよ…？ってん？この名前…」

「どうした大地？」

「これ、もしかしなくてもあいっただよな？」

3枚の入部届を確認する4人、それは奇しくもあの試合を見ていた4人と同じだった。

そしてそれが誰かに気づくと同時、清水以外の3人は歓喜の声を挙げた。



同時刻、男子バレー部の部室を訪れようとする3人の新入生がいた。

「こんにちはー！」

「男子バレー部の見学に来たんですけ…ど…」

「二いやっほーい!!」

しかし間が悪く、先輩3人が歓喜の声をあげている場面に遭遇してしまう。

「あ、間違えましたー」バタン

「二ちよつとまてーい！」

「うわっ!?!なんですか!?!」

「君ら、雪ヶ丘の2人とコート上の王様だろう?…待ってたよ！俺は主将の澤村大地！よろしく！」

「は、はあ…(この人こんなキャラだったっけ?)…初めまして、雪ヶ

丘中学から来ました、黄瀬涼太です」

「同じく雪ヶ丘中学から来ました！日向翔陽です！」

「北川第一中学から来ました。影山飛雄です」

「待ってたよ、俺は副主将の菅原孝支、そこでこの顔の怖い坊主が…」

「田中龍之介だ！…お前ら潔子さんに手え出すなよ…？」

「は、はい！わかりました！」ビクッ

その迫力に、思わずビビる日向、しかし後の2人は意に介しては居なかった。

「おい田中！何新生ビビらせてんだ！」

「いや、影山も黄瀬もデカいねえ、2人は身長幾つなの？」

凄む田中を無視して、菅原は2人に話しかける。

「189cmです」「180cmです」

先に答えた黄瀬に続き、影山も答える。

（俺も俺も！）「162cmです！」

「は…2人ともデカいねえ、それで日向は実物見て、数字聞くと試合で見てた以上にちっちゃいねえ」

「試合、見てたんですか!？」

想像以上に小さかった日向に驚く菅原に、試合で見てたの言葉に反応する日向、そして田中と澤村がそれに続く。

「そ、雪ヶ丘と北川第一の試合をな」

「あの試合の印象が強すぎてな…だから入部届を見てあれだけ喜んでたのさ」

「私達みんな、君達には期待してる」

「なるほど、変な人たちじゃなかったんですね」

「影山！オブラートに包んで包んで！」

得心がいったと言わんばかりに頷く影山に対して、慌てて注意する黄瀬、やはり言いたい事を言う性格は変わっていない。

「スガさん！やっぱりこいつ生意気っスよ！セッターはスガさんっス！」

「やめろやめろ、生意気でもなんでも、実力があってチームを勝たせら

れる奴が試合に出るんだ……勿論、実力で負けるつもりはねえけど」
影山の発言を聞いて菅原に話しかける田中、しかし菅原は諫めつつ、負けない宣言をする。先輩として、簡単にポジションは譲らないという強い決意が籠っていた。

それを聞いた影山は、

「勿論、俺も負けるつもりはありません。実力だけでなく、信頼も掴んでみせます……セッターにはそれが必要だと思うので」

「「っ!」」

息を飲む一同、【王様】としての一面を伝え聞いていた先輩達は、影山の威圧感も相まって言葉を失っていた。

——信頼か、成長したなあ、影山も

その中で、黄瀬は一人、保護者の様な目線で影山を見ていた。

「信頼……か、確かにそれは大事だな……しかしほんとに変わったんだなあ、良い話聞かなかったんだけど」

「うっ!?それは……まあ、こいつらのお陰って事で」

「嬉しい事言ってくれるなあ」

「普段もそれくらい素直ならな!」

「うっせえ!!」

そう言って2人を指差す影山と、それを笑って見る日向黄瀬、そんな3人の様子を目を細めてみる澤村。

「はっはっは、仲良さそうだなにより……お前らには期待してる、烏野は近年、成績が落ちてるからな……」

「任せてください!」

「勿論、先輩達も頼りにしますけどね」

「よっしゃ任せろ!どうせお前らの事だから、もう練習着、持ってきてるんだろう?着替えてこい、早速練習だ」

「「はい!」」

原作と違い、和気藹々とした空気でのファーストコンタクトとなった日向達、ここから、少しずつピースを埋めていき——

” 堕ちた強豪” 烏野高校の、そして、3人の飛翔が始まる。

スーパールーキー、お披露目

和気藹々とした初対面から1週間後、鳥野高校男子バレー部は更に2人の新入部員を加え、本格的に新年度の活動をスタートしていた。「いやー、まさか王様とあの2人が同じチームなんてね！ツツキー！」
「…山口うるさい」

”ツツキー”と呼ばれた長身の男が月島蚩、そんな月島に一蹴されたのが山口忠である。ポジションは共にMBだ。影山は兎も角、何故2人を知っているのかといえば、月島達もあの試合を見ていたようだ。

「いやー、しかし、今年の1年は豊作だな！人数は少ないけど、少数精鋭ってか!？」

「月島も山口も身長あるもんなくうちは高さが弱点だったから、心強いよ」

”とある事情”で新チームの最長身だった男が休部状態の鳥野高校男子バレー部にとって、180cm台後半の身長を持つ月島と黄瀬の入部は大きなものであった。

「いえいえーそんな俺なんて…！でもツツキーは即戦力ですよ！俺が保証します！」

「山口に何の保証が出来るの?」

「ごめんツツキー！」

少し嫌そうな顔をしながら言う月島に対し、ニコニコ笑って謝る山口、しかし月島も嫌そうな素振りを見せているものの、本気で嫌っている感じはない。

「はっはっはー2人は仲が良いんだな！それは何より！1年生同士仲良いに越したことはないからな！」

そんな2人の様子を見て笑う澤村、月島は初めこそニコニコした表情を崩さないでいたのだが、段々嫌そうな顔を隠す事は無くなってきていた…

無論、嫌いなタイプである【純粹で真っ直ぐな】日向を見てが多い。それを分かっていたからこそその澤村の発言なのだが、

「ま、程々にやりますよ」

このつれない返事である。

(ううくん、この性格、あの3人と合うのか不安だなあ…)

澤村は不安を感じていた。



新入部員の実力が気になっていた田中がとある事を思いつき、澤村に提案していた。

「大地さん！新入部員の実力が気になるんで、3対3で見たいっス！足りない1人は俺が入ります！」

「あー…いいかもしれないな、それ…でもポジション考えたらスガを入れる方がいいかもしれないな、セッター影山しか居ないし」

その提案を呑んだ澤村、部員を集めて説明する。

「今から1年の実力を見る為に、3対3をやろうと思う！チームは：そうだな、影山、日向、月島と、菅原、黄瀬、山口でやろうと思うんだが…」

「ちよつといいですか、キャプテン」

チーム分けをポジションと身長を考えて決めた澤村だったが、影山がそれを止める。

「日向と俺で挑戦してる物があって…それをやる為に、日向をMBにしたいです」

その挑戦とは、言わずもがな、変人速攻の事である。入学前、3人で練習している時に黄瀬に言われて既に練習を始めていたのだ。…それも、目を瞑るのではなく、新しい方の変人速攻だ。打点で止まる様なトスはまだ出来てはいないが、原作より高い日向の技量もあり既にその速攻は完成間近まで仕上がっていた。

「ええ〜？スパイカーとしてもちっちゃいのに、MBなんて出来ないデショ」

すかさず煽る月島、日向はそれに対し…

「確かに、俺に身長はない…だけど、俺はこの中の誰よりも跳べる、だから…この中で1番デカいお前だって、撃ち抜いて見せる」

「ふん、やれるものならやって見せなよ、叩き落としてあげる」

一触即発の空気が生まれたが、それを断ち切るように、

「はいはい！喧嘩はそこまで！後はコートで見せようぜ：キャプテン！俺がセッターやるんで、俺と月島と山口、相手は翔陽と影山と：田中先輩でやりましょ！」

黄瀬が割り込んだ上で、チームの提案までしてみせた。ちやつかりした男である。

「あ、ああ：みんながそれでいいなら」

「俺は初めから入るつもり満々だったし、構わねえよ！（それに、あの陰険眼鏡をぶっ飛ばす良い機会だしな）」

押されて同意した澤村と、やる気満々な田中、何か別の意図が含まれていたようだが、誰もそれに気づいてはいない。

「よし！じゃあその2チームで今から：いや、今日は時間がないから、明日にしよう！チーム毎に作戦とかもあるだろうしな、じゃあちよつと早いけど今日の練習はここまで！」

「「ありがとうございます！」」

◆ 今から始めようとした澤村だったが、一悶着あり時間が無いことに気づいた為、練習を切り上げた。

◆ 明日の事を相談しようと、黄瀬は山口と月島に話しかける。

「明日、ポジションはどうする？俺がセッターで、2人が打つので大丈夫か？」

「そうだね、僕も山口もMBだし、トスは苦手だから任せるよ」

「俺も同じく！明日はよろしく！」

「ああ、任せろ！：それで、何か作戦とかは立てなくて良いか？」

「あのおチビちゃんがMBやるんデショ？なら大丈夫じゃない？余裕デショ、君もいるし」

「：：：分かった、ブロックは任せるよ、じゃあまた明日な！」

そういつて2人と別れた黄瀬、

——月島のビックリした顔が見れると思うと、笑わずにはいらられねえや

黄瀬の性格は月島ほど悪くないのだが：やはり日向を馬鹿にされ

て思うところがあつたのだろう、明日が楽しみだとニヤリと笑うのであつた。

そして、日向サイド

「ムキー！なんだアイツ！嫌な感じだな！」

「ふん：俺らの”アレ”を見せたら、否が応でも認めざるを得ないさ」
「：！”アレ”、やるのか!？」

「俺らの実力を見せるのには丁度いいだろ、アイツには、誰に喧嘩売つたのか分からせてやらないとな」

「そうだな！度肝抜いてやる！」

2人は月島の態度にかなりご立腹であつた。それもそのはず、身長を弄られた上に叩き落とす宣言までされてしまつては：セッターの影山にも火がつくのは当然の事と言えた。

「おうおう！2人で何話してんだ!?!心配しなくても、俺が居るからな！あんなひよろひよろ眼鏡のブロックなんざ、ぶっ飛ばしてやるよ！」

「田中先輩！頼りにしてます！」

「田中さんの実力、楽しみにしてますね」

「おう！まかしとけ!……それで、さつきチラチラ聞こえてきた”アレ”ってなんなんだ？」

「それは、明日のお楽しみです」

「きつと先輩もビックリすると思いますよ！な、影山！」

「ええ、間違いなく田中さんを、いやみんなを驚かせる自信があります」

「ほおー！そりゃよっぽど凄いだらうな！明日楽しみにしてるわ！」

「はい！明日はよろしくお願いします！」

「お疲れ様でした：いい試合をしましょう」

「おう！お疲れ！」

(ただ、相手に黄瀬／涼太がいるんだよなあ：)

変人速攻をかます事に決めた2人だが、それを知ってる黄瀬が相手にいる。そんなに決まらないかもしれないと覚悟を決め：

「おーい！影山、翔陽！帰ろうぜ！」
その黄瀬と3人で帰路についた。

◆ 次の日、アツプをすませ、早速3対3をやる事に。

「よーっし、集まれー！…互いに全力を尽くすこと、今日はプレーに集中すること、いいな」

澤村の号令で集まり、ネットを挟んで向き合う6人。プレーに集中すること、は随分力を込めて言っていた。

(月島の煽りはアイツらに効きそうだからなあ…良くも悪くも)

「小さいのと田中さん、どっちが先に止められるかなあ？まあ、どっちが先でも一緒デシヨ、黄瀬君もデカいしー」

早速煽る月島、ここまで来ると最早病気ではないかと思う黄瀬であつたが、ここは2人を乗せて置こうかと黙って聞いている。

「ちよっ、ツッキー！今の相手に聞こえてるんじゃない!？」

「聞こえるように言ってるの、冷静さを欠くかもしれないデシヨ？」

「ほんとに性格悪いのな…まあでも、相手見て煽った方がいいんじゃないの…?」

「いやいや、見事に正解デシヨ、お相手さん、完全に頭にきちやつてるみたいだし」

「頭に来るのがプラスに働く人もいるって意味だが…まあ、やりやあ分かるよ」

煽りを聞き、相手チームは見事に燃え上がっていた。影山は表情にこそ出ていないものの、威圧感が出ているため丸わかりである。

(最初は田中さんに行こうと思っていたが…決めた、初手速攻で決めてやる…でなきや腹の虫が収まらねえ)

そして、試合が始まった。

まずは山口のサーブから、田中がしつかりと上げ、影山にAパスが入る。田中は怒りを隠すことなく跳躍し、

「よっしや来い影山あー！」

と叫んだ。

それを後目に、影山の背後から高速で動く影。

「はっ！」

完全に田中で来ると思っていた月島は、日向について行くことが出来なかった。

飛び上がる日向、その瞬間、超高速のトスが日向目掛けて放たれる。当然、目の前には誰もいない。

——ドパツ!!

誰もいないコートに叩きつけられたボール。

体育館内は静まり返る。

「よっしやあああ！」

「良くやった日向！」

静かな体育館に響いたのは、喜ぶ2人の声と、

「あははは！良くやった2人とも！」

対戦相手にも関わらず、ポカンとする月島の顔を見て大笑いする黄瀬の声だけだった。

スーパールーキー、激突

「よっしやああ!!」

「あはははー!」

喜ぶ3人(喜び方に違いはあれど)と対照的に、他の部員はポカリと口を開け、言葉が出ないでいた。

その沈黙を破ったのは、

「お、おお…? 何だ今のすっげえな! そういえば…これが昨日言ってたやつか!」

やはりムードメーカーである田中、昨日何かをやるだろう事は聞いていた為、身構えては居たのだが…

月島に煽られた事で完全に頭から抜けていたのか、皆と一様に驚いていた。

「いやいやこれは…」

「凄いもんを見たなあ…」

「あの速攻はヤバいって!」

そして驚きから解放され、そろって賛辞を送る先輩達、しかし月島は苦々しい顔で日向と影山を…ではなく、黄瀬の方をグルりと振り返り、

「今の…黄瀬くん知ってたデシヨ?」

「勿論」

「じゃあなんで言ってくれないのさ」

「いやー、試合形式で繰り出すまで完成してるとは思わなくてさー」

「…:(チツ、絶対知ってたよこの男) ふくん、そうなんだ、じゃあ仕方ないね」

あからさまに不機嫌そうな月島、それもそのはず、黄瀬は口ではこうは言っているものの、さほど驚いている様子が見られないからだ。

そして黄瀬は一泊置いて…

「ああそうだな、仕方ない…だけど、面白いのは1度だけさ、次からはそう簡単に決めさせないよ」

笑顔から一転、真剣な表情でそう言った。

その表情を見た月島は一言、
「…じゃあ期待してるよ」
そういつて向き直った。

◆ 一方、見事な速攻を決めて見せた影山、日向組は、
「よつし！これは本番でも使えそうだな！」

「ああ、これは大きな武器になる…が」

そういつて黄瀬を見た2人、しかしタイミング悪く、丁度笑顔から真顔に切り替わる瞬間であった。それを見た2人は、

「やっぱり、アイツ相手には難しいかもな」

「それでもやってやる、涼太にも負けないって所を見せてやらないと」

「おいおい！俺の事忘れてねーかあ!？」

「いついえ!?!忘れてません!」

「忘れてませんよ…それに、こいつの役割は速攻だけじゃないですから」

空気になりかけたことを敏感に察知した田中が2人に割り込んできた。それに対し、日向にはまだ隠し球があると言わんばかりの影山。

「まだなんかあんのか!?!」

「ええ、こいつの最大の武器、というか役割があります…手持ちにある武器を最大限活かすか殺すか、それはセッター次第です。安心してください、手持ちの武器全部使っても、あの怪物を倒して見せますよ」

◆ スコアは0-1、田中影山日向チームのリードでサーブは影山。
黄瀬にサーブのコツを聞いた影山は、威力はそのまま、格段にコントロールを向上させている。

(黄瀬以外の2人はMB、恐らくレシーブは得意じゃないだろう、どっちか狙うのならば…)

影山から放たれたジャンプサーブは、寸分変わらず月島の正面へ、

(レシーブ苦手だったのに…!)

正面とはいえ、レシーブが得意ではない月島にとって影山のサーブ

は強烈だった。

辛うじて上げたものの、かなり乱れてしまう。

「任せろ！」

素早く落下地点に入った黄瀬、かなり距離があるものの、オーバーハンドでのトスを選択した。

「山口！」

(うわっ、綺麗なトス…黄瀬ってスパイカーなんじゃないの?)

黄瀬の放ったトスは綺麗な弧を描き山口の元へ、しっかりと助走を取った山口は、1枚ブロックをもともせず冷静に空いているサイドにスパイクを決めた。

「ナイス山口！」

「いやいやいや！今のはトスが完璧過ぎるって！黄瀬ってスパイカーだよな?！」

駆け寄る黄瀬に、ほんとにスパイカーだったのかと思わず聞いてしまう山口。

「いや〜中学時代は色々な事やってたからな！トスもその一環だよ！」

「は〜、王様もそうだけど、つくづく天才ってのは恐ろしいね、ま、それが今は味方だからいいけど」

「…んー、1人じゃバレーはどうにもならないって、俺も影山も日向も知ってるから。だから俺は月島も、勿論山口も、みんな頼りにしてる」

笑顔の黄瀬に対し、嫌味つたらしく答えた月島であったが、それにも笑顔で返され、思わず言葉に詰まる。

「つ…：…恥ずかしくないの、そんな事言って」

そういつてそっぽを向く月島、その様子を見た山口は小声で、

「ああいう時のツツキーは、照れてるだけだから大丈夫」

「そうか、教えてくれてありがとう」

「…山口うっさい」

ニヤニヤ笑う2人に対し文句をいう月島であったが、その声についてもの強さはない。

「さて、結束も強まった事だし、しっかり勝とうぜ！」

◆ 試合はその後、

「どっせええええいー!」

田中が月島のブロックを弾き飛ばし1―2、

「うぎゃー!!」

日向がサーブをネットに引つ掛け2―2、

そうして向かえた黄瀬のサーブ。

(今回は練習の一部だからスコアは短めの5点先取、練習とはいえ負けるのは嫌だし、俺のサーブで決めてしまいたい)

「…あいつのサーブは、俺のよりも数段凄いつすよ」

「マジで? さっきの影山のサーブも相当だったぞ?」

「ありがとうございます、でもあいつのサーブは俺の比じゃないんで…」

「俺が死ぬ気で拾う!」

黄瀬のサーブに対し、最大限の警戒をする3人。2人では守りきれないと、影山までレシーブに入る徹底ぶりだった、それでも――

「シッ!」

放たれたスパイクサーブは、エンドラインいっぱい、誰も触れることのないノータッチエース。

「あああ! ちくしょう! 取れなかったー!」

「3人だともうあれは仕方ないすね」

「かーっ! ほんとにもう今年の1年はどいつもこいつも! かーっ! …味方で良かったぜ! 全く!」

悔しがる日向と仕方ないと首を振る影山、そして味方で良かったと騒ぐ田中…しかし3人とも両眼で黄瀬を見据えている。

(取れるもんなら取ってみな!)

そして再び放たれる強烈なサーブ、しかし今度は日向が食らいつく。

「ふんぎいい!!」

「おお! あのサーブを上げたぞ!」

しかし拾った時に体勢を崩した日向、影山はチラツと日向を一瞥すると、田中の方に向き直る。

(あの体勢からは間に合わない!田中さんに上げるしかない!)

そう判断し田中のマークを強める月島、しかし日向は直ぐに動き出していた。

(拾う、立つ、走って、跳ぶ!)

日向は驚異的なボディバランスで、直ぐに立ち上がり走り出して居た、月島は田中に目がいつており、日向に気づいていない。

「俺に!持つてこおおい!」

そして、ライトへの平行トス。

——なんで

そう思ったのは、完全に振られた月島ではない、いや、正確には月島”だけ”ではない。

——なんで、涼太がそこにいる!?

「ドシャットオオオオ!!」

完全に意表を突いたはずの日向のスパイクは、後ろにいたはずの黄瀬によって叩き落とされた。



黄瀬によるブロックの後、もう一度黄瀬がサーブエースを叩き込み、試合は黄瀬 月島 山口チームが5―2で勝利した。

「あああ!悔しい悔しい悔しい!もう1回!もう1回勝負!」

「小学生かっつての、いいだろ?これからは味方なんだから」

「うるせえぞ日向ボゲエ!これから練習なんだ、そう何回もさせて貰えるわけねえだろ!明日リベンジだ!」

「いや明日もやらねえから!」

悔しくて駄々をこねる日向と、悔しすぎて昔の口調に戻る影山、日向に対しボゲエとは言っているが、内容は日向と同レベルである。

「いや〜見事にブロックされてたね〜」

「うるせえ!お前は1本も止めてないだろ!」

「完全に俺らの速攻に置いていかれてたしな」

「:ならもう一度打ってきなよ、今度は完全に止めてあげるから」

ニヤニヤしながら2人を煽る月島であったが、2人に痛いところを突かれてしまい、寧ろ自分がムキになってしまう始末、収集がつかなくなりそうだったが…

「はいはいーそこまでー……キャプテン見てみる、笑顔だけど目が全く笑ってないぞ…」

一度言い合いを止め、小声でそう教える黄瀬。実際澤村の目は全く笑っておらず、如何にも爆笑寸前と言った様である。

「田中さん曰く、キャプテンは普段めちやくちや優しいが怒るとヤバいらしい…怒られたくはないだろ?」

そういうと、無言で頷く3人、こういう時だけ息ピッタリな様子に、思わず黄瀬は笑ってしまう。

「よし!じゃあ練習に戻りましょう!キャプテン!」

「いやー、ほんとに黄瀬が纏めてくれて助かるよ、そうでなきや…な?」

「「あ、あはは…」」

もうキャプテンには逆らわないでおこうと思う1年生組だった。



「涼太!なんで俺にトスが来るって分かったんだ?」

練習後、ずっと気になっていた事を黄瀬に聞く日向。

「サーブの後、日向が直ぐに体勢を立て直して走ってくるのが見えた。月島は完全に田中先輩の方を向いてたし、影山ならこっちに出すかなって」

「完全に出し抜いたと思ったんだがな…」

「後ろに居るから見えたってのもあるし、本来後ろからブロックに入ることは出来ないからな、普通なら決まってるよ」

「うがー!悔しい!サーブも1本しか取れなかったし!」

「…もつともつと、練習しなきゃな…俺は世界に行く、その為に、まずはお前らを超えてみせる」

悔しさを露わにする日向と、もっと上手くならねばと思う影山、それを聞いた黄瀬は…

「だったら俺は、2人以上に頑張って、一生越えられないようにしな

きやな」

「1番強くなつて、1番コートに長く立つの俺だ！お前らにだつて負けねえぞ！」

そう、3人で切磋琢磨する事を誓つた。

彼らはこの先何年、何十年と競い合い：生涯の友であり、ライバルとして過ごして行くのだが、それはまだ先のお話。

激闘、また激闘

激闘の翌日

烏野高校職員室では、1人の先生が頭を抱えていた。

「折角有望な1年生が入ってきたみたいなのに…」

今春から男子バレーボール部の顧問になった武田一鉄は、コーチのあてもなく、練習試合も組めない事を悩んでいたのだ。しかし、そんな彼の元に、吉報が舞い込む。

「武田先生、電話が来てますよ」

「は、はい！ありがとうございます！…それで、お相手は…？」

「青葉城西高校からですって」



「組めた！組めたよー！！！！」

練習中のバレー部の元に駆け込んできた武田、余程慌てていたのか、ワイシャツはぐちゃぐちゃ、ネクタイは曲がり、汗だくであった。

「練習試合！相手は県ベスト4！！青葉城西高校です！！」

「ええっ？青城？」

「どうやってそんな所と組んだんですか？」

思わぬ情報に、練習の手を止め先生の元に集まる部員達。

「いやー、というのも青葉城西側から連絡が来てね！…なんでも、黄瀬君日向君影山君の3人を試合に出す事を条件にって」

中学のあの試合、影山は有名選手であった為、当然県内の強豪チームは試合を見に来ていたのである。

そして、あの試合を観て3人に興味を抱かないはずは無かったのだ。

「あ、自己紹介がまだだったね！今年から男バレ顧問になった武田一鉄です！…バレー経験はないから、技術的な指導は出来ないけど、それ以外は全力で頑張るからよろしく！」

「二はい！よろしく願います！」

「何で先生はこれまで来なかつたんですか？」

初対面となる1年生は、これ程までに練習試合を組めた事に喜んで

いる先生が、何故練習に来なかったのか疑問に思っていた。

「あー：それはほんとにごめんね！練習試合を組んでもらうために、他校に行つてたから…」

「ええっ!?なんかすみません!」

体育館に来なかつた理由がバレー部関係の事であり、必死に頑張つて貰つていた事に気付かず失礼な事を聞いてしまったと日向は慌てて謝る。

「いいよいいよ、来れなかつたのは悪かつたしね…それで、具体的な条件なんだけど、黄瀬君日向君影山君をフルで出すこと、影山君はセッターで、2人は任せるつて事なんだけど…」

「なんスかあ?それえ…ウチに興味はないけど、3人は警戒しときたいつて事ですかあ?なんなんスかあ?ウチの事舐めてんスかあ?ペロペロですかあ…?」

「い、いやあ…そういう嫌な感じではなかつたよ…」

イラついて先生に絡む田中を見て、おっと不味いと黄瀬が手を挙げる。

「多分…というか間違いなく、俺らが勧誘断つたからじゃないですかね?」

「あー：あんだだけの試合だもんな、やっぱり青葉城西から勧誘来てたのか、影山見に色んな所来てたし」

「はい、白鳥沢からも来ました、な、翔陽」

「ええっ!?白鳥沢からも来てたのかよ!?よくウチに来てくれたなあ」

「いや！俺は最初つから烏野つて決めてたんで!」

「そういう事です」

白鳥沢からも勧誘があつたと聞いて驚く一同であつたが、日向の真つ直ぐな言葉に胸を撃たれた。

「はい！それで、条件はこの通りなんだけど…どうする?」

誰か1人なら兎も角、条件は3人をフル出場、必然的に、出られる選手は限られてくる。烏野の戦績は以前ほどではないにしろ、全国を目指し練習をしているチームである。強い方が、上手い方が試合に出るのは決まりきっているのだが…

「良いんじゃないでしょうか、4強の一角とやれるチャンスなんて早々ないでしょうし」

武田の意図をいち早く汲み取った菅原がそう答えた。

「…っ！いいんスカスガさん！影山はセッター指名、烏野の正セッターはスガさんじゃないっスカ！」

目を閉じ、少しだけ黙る菅原、数秒後に目を開いて答える。

「良いんだ、俺はこの3人が4強にどこまで通じるか、それが見てみたい」

勿論、諦めた様な表情ではない。

1年生にポジションを奪われる事は悔しくてたまらないのだ、しかし、それと同じくらいに期待感を持っている。

田中は納得していない表情を浮かべたが、菅原の表情を見て何も言えなくなった。

「…先生、試合の詳細をお願いします」

「うん、日程は急なんだけど、来週の火曜日。放課後で時間がないから1試合だけ。学校のバスを借りていきます。HRが終わったら、すぐに校門に集合、遅れないようにね」

「「「「「はい!!」「」「」」」」」

そして、練習後

「スガさん！俺、まだ納得してないっスよ！」

「まだ言ってるのか…そりゃあ、俺だって悔しいよ」

まだ納得してないという田中と、それを苦笑いで受け止める菅原、そんな2人の元に、影山が走りよった。

「菅原さん！…あの、次は実力で、ちゃんとレギュラー取ります」

「うえっ!?!…影山が俺より凄い選手だって事は分かってる。だけど俺も、このポジションは簡単に譲るつもりはないよ」

「そんな事はないです！経験とか、信頼とか…簡単に埋まるもんじゃないので！でも、負けません」

「ああ、正々堂々、勝負だな」

そうして、日は進み、

またすぐに、激闘が始まる。